

蒼生

2018年
4月号

広報誌「蒼生」バックナンバーはホームページ<http://kusumoto.or.jp/>に掲載されております
冊子をご希望の場合、職員にお声がけいただければ過去の広報誌を差し上げる事もできます

理事長就任あいさつ 森末千春

平成三十年二月十六日、
医療法人蒼生会理事長楠本剛が九十年の生涯を閉じました。生前のご厚誼に深謝し、心から御礼申し上げます。

私はこの度、前理事長楠本剛の後任として理事長に就任した森末千春です。

楠本剛、江美子の三女として生まれ、バラ公園近くの御門町に五十五年前に楠本外科病院を開業した父の背を見て育ち、その意を継いで医師となり、今、医療法人蒼生会楠本病院の理事長となりました。

父の自室である居間には

「鬼手佛心」としたためた書が飾られていました。患者様が父に贈って下さった言葉です。手は鬼のように乱暴なことをするが、病を治す一心で心は佛のようだとその患者様は仰られたと父は申しております。私は内科医ですが、

患者様の訴えに耳を傾け、一つ一つ納得のいく返答が出来るよう病院職員の協力のもとに努めてまいりました。今後その姿勢を崩すことなく、協力してくれる職員の皆に敬意を表し、また亡き父に感謝しながら日々邁進していきたいと思います。



祖父像
金沢大泌尿器科助教 飯島将司 画

本年2月で当院も曙の地に移転し30年となりました。その間社会や経済情勢も大きく変わり、少子高齢化が二〇三〇年

に向けてさらに進む勢いで

す。また、医療環境や医療保険、介護制度も大きく変貌しております。医療技術や新規医薬品の進歩にも目覚ましいものがあります。しかし、医療の本質は普遍的であって、病む者、傷つき倒れる者を前にした時に思わず手を差し伸べる思いが根底にあるものと思えます。また、患者さんが健康を取り戻して笑顔になられる光景を見ると、また頑張ろうという気持ちになれます。この思いは、前理事長楠本剛が曙に病院を移転する際に全職員に病院の理念として伝えた強い意志であります。時代が変わっても、

この思いは私をはじめ全職員が胸に刻み、日々の診療、看護、介護にあたりたいと思っております。何とぞ前理事長同様 格別のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

理念 地域医療のニーズに応え住民の皆様の信頼を得る医療をめざします

基本方針

- ・急性期から慢性期さらには在宅支援まで含めた幅広い医療を提供いたします
- ・患者さんの安全を最優先に考える医療を行います
- ・新しい技術と知識の習得に努め、良質の医療を提供できるよう努力します
- ・快適な療養環境づくりをめざします

CONTENTS

- ・理事長就任あいさつ ***** 1
- ・義父「楠本剛」断想 ***** 2
- ・楠本病院 開業55周年
移転30周年記念 ***** 4
- ・北病棟レクレーションたよりの
プログラム ***** 4
- ・認知症に関する法的備え ***** 5
- ・看護師・准看護師合格 ***** 5
- ・お別れ会のご案内 ***** 6
- ・オープンカンファレンス ***** 6



日本医療機能評価機構

義父「楠本剛」断想

名誉院長 飯島崇史



私が楠本剛という人に初めてお目にかかったのは昭和52年春ごろであったと記憶している。昭和51年大阪医大を卒業して岡山大学第一外科に入局。かねてより希望していた小児外科を扱う国立福山病院に赴任として来ていた時のこと。川口の官舎4階に住み、連日深夜まで仕事に明け暮れていた。官舎の向いの部屋には6年上の山元先生が単身赴任で入った。夕食は二人で中華、すし屋、炉辺焼きの3店を順番に回る生活。何れも深夜まで営業しているから。ある日「たまにはホテルのレストランで飯を食わんか」と誘われ、仕事を切り上げ付いてゆこうとすると、「ホテルにその格好ではまじだろ。サングラスは靴に、スポーツシャツはブレザーにでも」と指摘され、それもそうだと何も疑

わずついていった。グラントホテルのレストランは閑散としていて、一組の客のみ。知り合いらしく山元先輩、つかつかと歩み寄り挨拶をしたかと思うと、手招きをして「こちらは第一外科の大先輩、楠本先生ご一家。とてもえらい先輩だから丁寧に挨拶を」といって同席することとなった。拝見するところ50歳くらい、温和で話し上手。ついつい引き込まれてしまう。15〜16年前父親の失明で大学勤務をあきらめ帰郷。大学退官時は、陣内教授、田中早苗助教授に次ぐ筆頭講師として将来を嘱望されていたが、親の面倒を見るため地元に戻って開業したとのこと。当時福山で全身麻酔外科手術を行っていたのは福山陸軍病院（後の国立福山病院）と、楠本外科より5ヶ月早くオープンした教員共済中国中央病院しかなく、難しい手術の時はしばしば指導に呼ばれて行ったそう

だ。ほかに奥さんと娘さんが同席していたが、でしゃばることなく静かに微笑むだけだった。後に先輩から、実はこれが私の人生一度きりの見合いであったのだと知らされた。一月ほどたつて楠本氏から電話があった。「先日は私ばかり喋り捲って、娘が話しをすることができなかった。ついては一度デートにでも誘ってもらえないだろうか」実は私も生来無口なたちで、相手の女性も無口だと気詰まりだと憂慮していたのだが、取り越し苦労であったようだ。付き合い合ってみると、なかなかよくしゃべる。実は見合いの直前、母親から「あなたはおしゃべりだから、くれぐれも話しすぎでぼろを出さないように」と注意されていたので黙っていたと知り安堵した。

飯島家は晩酌の習慣がないため夕食は15分ほどですべて終了。まだ酒など飲んでいてもかまわず席を立ち、食卓の上を片付けにかかる。それに引き換え楠本家では、主人が一連の夕食を終了するまで誰も席を離れることなく、お茶など飲みながら話に加わる。おむね1時間半ほど。また私が勤務先でなかなか手術をさせてもらえない（当方の腕がまだ未熟なせいもあるのだが）ということがわかると、「うちで執刀させてあげると、夕方勤務が終わって、また、土曜の午後も来てみなさい。」こうして各種疾患最低2例づつ、術者をさせてもらった。付き合い合わせた手術場の看護婦はたまったものではなかったろう。義父なら短時間で済む手術を、あえて夜に行い、手術時間も2〜3倍かかるのだから。あるとき虫垂炎を要求すると、「まだ要るん

すか。うちの先生、アッペはガーゼ3枚と決まっているんですが。」ぐつとこらえて頭を下げた。7年後、新規移転増築した真新しい病院手術場で副院長となっていた私がこの話を当該看護婦にしたところ、「あら、そんなこともありましてかね〜」と軽くいなされた。私の両親、特に母親は息子の報告を聞き、がっかりした様子で愚痴をこぼした。祖父の代から親戚の大半が医者の家系で、本家の長男に当たる三代目が、実家の医院を継ぐには幾分都合の悪い医局を選び、あろうことか、しかるべき相手と見合いをさせようと準備していたのに、勝手に自分で決めてきた。しかし相手に不足があらうはずなく、最終的には了承してめでたく挙式と相成った。その結婚披露宴で最後の場面、お互いの両親に花束を手渡しとき、ふと見ると義父の目にはうっすらと涙らしきものが。そして両手を

がっしりとつかまれ、口元がかすかに動いたようだった。ほとんど聞き取れなかったが、「娘を頼むぞ。わしの目の黒いうち、もしも不幸にさせるようなことがあったら許さんぞ。」そう言っているように思えた。以来四十余年、ついに義父の眼は閉じられてしまっただが、言いつけは守ったと自負している。

家内には姉と妹がいて、眼科医の姉は同じく第一外科の先輩とすでに結婚していたが、妊娠中に乳がんを発症。すでに妊娠末期となっていたため、帝王切開で女兒を取り出したのち手術を受けた。当然その予後は不良で、義父は阪大医学部と芸大ピアノ科の選択に迷うほど優秀であった29才の長女を失うこととなつてしまった。その怒りにも似た悔しさは想像に余りある。結婚したとはいえ、同居していたわけではないので、両親の葛藤や姉の苦しみに接すること

がなかったが、詳細は碧天文芸大賞出版化奨励作に選ばれて家内が上梓した「葉月に（碧天舎）に描写されている。（この本は生まれてすぐ母親を失った姪のために、「あなたのお母さんはこんな人だったのだよ」と叔母が語り掛ける内容だが、出版社倒産のため現在は絶版となっている）娘の死後、氣力の失せてしまった義父に、何とか立ち直ってもらおうと、新しい病院を立ち上げようという案がもちあがった。娘ばかりで古くなつた病院も自分の一代限りとあきらめかけていたところ、私が手伝いますと申し出たことで氣を取り直し、昼休みは自転車で工事現場に通つて日々を過ごすようになった。

開院初期は人手も少なく、60過ぎの義父は週に一度、三女と結婚した義弟森末は大学勤務の傍ら土曜の当直を、残り週5日の当直を私が担当した。そのうち義弟が赴任の形で帰ってくる、義父は若い者たちの妨げに

なるとして手術室には入らなくなり、広大な自宅の庭の手入れなどに精力を注ぐようになった。その頃私がそろそろ自宅を建てようと土地を物色しているのを知ると、自宅の一部雑木林のようになつているところを提供するから、そこに建てたらと申し出てくれた。使っていない雑木林ならと安易に申し出を受けてしまったが、そこは義父が非常に大切に自ら果樹の苗などを植えて雑木林風にしていたところと後に知った。朝二階の寝室で寝ていると、夜明けとともに窓の下で落ち葉を掃き集める音がするではないか。庭の手入れをせぬ婿に説教するかの如く。

平成17年院長交代後は、人前で話をする練習にと毎週月曜日の始業前、全員朝礼で数分間の職員訓示をするようにとの指示があった。義父の挨拶は医師会の中でも定評がある。彼は常々大学の上司であつ

た田中早苗教授の話し方を称賛していた。聞いているときはそうでもないが、帰つて思い返してみると、やんわりと皮肉を交えて諭されていることに気づかされるのだそうだ。後から効くボディブローのようだったと。達人のまねはできないが、朝礼では勤務の都合で出席できない職員のため、院長訓示は事務が文字起こしをして院内ネットに掲載する。記録に残るので同じ話は二度と使えない。前日の日曜は資料集め、数分の文章での起承転結、ポイントセンテンスの選定などに苦しんだが、この経験は大きな財産となった。

義父は楠本家で男三人女二人の長男として生まれ、腕白でけんかも強かったと聞く。旧制広島高等学校から岡山大学に。次男は産婦人科開業、三男は第一内科から倉敷中央病院院長補佐になつている。野球とゴルフを好み、面倒見の良い親分肌である。広高時代けがをして、間借

りしていた家主の娘井野江美子と知り合い、岡山大学進学後、学生結婚をした。卒業時には長女を連れていた。そういう意味から若いころは夫婦とも苦しい生活であつたと想像に難くない。入局後は手術時の感染か、非A非B肝炎で1年間入院しており、決して楽な人生ではなかったが、活力氣力は十分だったのであろう。

偶然にもこのような先輩に巡り合い、大切な娘のみならず、土地の提供、手術や話し方の指導など多くの恩恵を授かった。その義父も90という年齢となり、ついに2月16日生涯を終えたのだ。親族だけで静かに見送りの四十九日の法要も終えた。仏教では四十九日までの間を中陰と呼び、死者の靈魂が新たに生まれ変わるまでの間、そこかしこを漂い、残つた者たちを見守り導くという。この間変事もなかったことから、安心して後をゆだね彼岸に旅立たれたものと推察する。改めて感謝。 合掌。

かけて下さいました。その笑顔にティにあふれ、常に患者様のことを第一に考えておられる姿勢には感銘を受けました。

平成元年、採用面接を受けに行った私に、楠本理事長から「明日から来い」との言葉を頂いてそのまま楠本病院に入職し、気がつけば29年にもわたって仕事を続けてまいりました。

私が入職した当時は楠本病院が曙の地に立ち上ったばかりで、「地域の皆様のために役立つ」という思いで皆で協力し部署を越えて助け合っていました。まだみんな若く、余力もあつたのかなと思いますが、当院ではこのころからチーム医療を行っていたのではないかと思います。

楠本理

事長は優しい笑顔でいつも私たちの職員のことを気遣い、声を

何度救われたかわかりません。

飯島名誉院長にはスキーに連れて行って頂いたり、みんなでテニスを楽しませて頂いたり、仕事以外のことでも懐かしい記憶がたくさんあります。当時、飯島名誉院長は当直が多かった

ので、天満屋ハッピータウン緑町店(当時)の夕方タイムサービスに行つては何やら買い込んで、当直室で料理を楽しんでおられたように記憶しております。週末は森末院長が当時勤務されていた岡大病院から楠本病院5階にあつたご自宅に帰って来られていましたので、必然的に休日の診察に対応して頂いて

いました。当時より新しい治療法や薬剤に興味を持たれており、森末院長からの問い合わせにお答えするのに必死だったので、私も深く勉強するしかありませんでした。森末内科部長は今の御姿と変わらずバイタリ

その後、医療情勢が目まぐるしく変化していったのは皆様もご存知の通りです。薬剤師として大学で学んだ知識だけでは不十分でしたが、このように楠本

病院で働くことによつて多くの知識や技術が身に付いたと感じています。こうして長い間勤めてこられたのは、楠本理事長、飯島名誉院長、森末院長、森末内科部長をはじめ、スタッフの皆様のおかげと感謝しております。今後、特に女性が長く勤めることが出来る職場である為に、みんなで

理解し合い、協力していくことが必要であると感じています。これを機にまた気持ちを新たに

にして、次なる目標に向けてスタッフ一同力を合わせ、感謝と思いやりの心を持って、患者様の心に寄り添いながら、より良い医療を提供していきたいと思つております。

北病棟レクレーションだより

2月28日当院療養病棟において「春のレクレーション」を開催しました。

初めに、「春の小川」「春よ来い」2曲歌い春らしい雰囲気になりました。

その中で画用紙に書かれた枯れ木に、色画用紙で作った桜の花びらを皆で一枚一枚貼り付ける、貼り絵をしました。あつと

いう間に満開の桜の木が出来上がり、一足早いお花見をしているような気分を味わうことが出来ました。次に「玉入れゲーム」と題して、赤・白チームに分かれ、紙で作ったボールを籠に投げ入れる「玉入れ」を行いました。普段腕をあまり動かされな

い患者さんも、昔運動会などで経験されたことを思い出



す。今回は沢山のご参加をお待ちしております。

されたのか、一生懸命ボールを投げ入れておられました。最後に甘酒とお菓子で

貼り絵は新しい試みで、皆さんに作っていただいた作品は、ご家族の方にも見て頂けるようにロビーに飾っております。

今年はインフルエンザの流行の為、寂しいレクレーションになるのかなと心配していましたが、マイクで一生懸命歌を歌ってく

ださいました。短い時間で、楽しいひと時を過ごすごことが出来ました。夏には又、楽しいイベントの制作・準備中

です。次回はお待



平成30年2月3日

高齢化社会では認知症になった人の財産管理をどうすればよいかということが問題となります。

判断能力が低下した人の財産を守る制度としては「成年後見」というものがあります。

これは判断能力低下の程度に応じて「補助人」「保佐人」「成年後見人」といったサポートをする人を付けて、認知症に付け込んで財産を巻き上げようとする悪徳業者等から本人の財産を守ろうというものです。未成年の子に対する保護者の役割と似ています。

後見には親族等から申立があったときに裁判所によって後見人が選任される「法定後見」と、将来自分の判断能力が低下したときに備えて予め後見人を選んでおく「任意後見」があります。

下してしまった後、親族等からの申立によって手続が開始します。判断能力について診断した医師の診断書を裁判所に提出して、補助・補佐・後見のいずれに当たるのか判断してもらいます。補助や補佐の場合、本人の判断能力がある程度残っているため、補助人・保佐人の同意がなければ借金をしたり不動産を処分したりできないようになります。後見は本人の判断能力がないものとみなされた状態なので、後見人が財産管理を一手に担うこととなります。

～プロムナード～

認知症に関する法的備え①

士道法律事務所 弁護士 飯島 充士

が、多くのケースで弁護士や司法書士といった法律に詳しい第三者が選任されます。これは家族間のトラブルを防いで公平な立場から財産を管理させるためです。

もう一つは「本人に中途半端に判断能力が残っている場合に申立自体ができないことがある」ということ。判断能力低下の程度が一番軽い「補助」の場合、補助開始の審判を行うには本人の同意が必要となります。本人が「自分はまだしっかりしている！」と反抗したら申立自体ができないのです。

任意後見ならこれらの問題はクリアできますが、自分認知症になった時の備えを早くからできる人というのは稀です。また、任意後見であっても後見という制度の特質上、一定の問題は発生します。次回は成年後見の問題点について触れてみます。

(つづく)



看護師・准看護師合格者

この3月に福山市医師会看護専門学校を卒業し、2月に行われた看護師国家試験にも無事合格することが出来ました。高校を卒業し、一人、福山に来て、この病院で働き始めて7年が経ち、1年間、学校を休学することもありましたが、ようやく学校生活を終了する事が出来ました。これも仕事の中で多くの学びを与えて下さった病院のスタッフの方々や患者様、遠くから支えてくれた家族をはじめとする自分に関わる全ての方々のサポートがあつてのものであると感じ、とても感謝しています。

この4月から看護師として第一歩を踏み出しますが、自分は患者様や病院内のスタッフに信頼されるような看護師になりたいと思っています。そのためにも、一日一日を大切に、日々の学びを深め、知識、技術の向上に努めていきます。



オバ・サプライ 野村

この度、准看護師資格試験に合格いたしました。お忙しい中ご指導いただき、ありがとうございました。今まで以上に責任を持ち、誠意のある看護が出来るよう、努力していきます。

四階病棟 吉川

H29年度合格者の方へ

准看護師試験、看護師国家試験合格おめでとうございます。学校と仕事の両立は大変だった事でしょう。皆を見ていて、学校で疲れているのに、また仕事に来て、そして帰ってはテスト勉強や実習の記録をされるなんて、本当に大変だったと思います。この度試験に合格され、その大変だったことも思い出になっ

たことでしょう。これから准看護師として、また看護師として働かれるわけですが、医学は常に変化しています、これからも常に勉強し、知識と技術を磨いて下さい。そして患者様から慕われる優しい看護師になって下さい。

看護部長 高橋由記子

お知らせ

「お別れ会」のご案内

弊 蒼生会 楠本病院 理事長 楠本剛 儀

二月十六日 90歳にて永眠いたしました。ここに

生前のご厚誼を深謝し謹んでご通知申し上げます

なお密葬の儀は近親者のみにて相済ませました

ご連絡できなかったことお許し下さい

つきましてはありし日の故人をしのぶため

「お別れ会」を左記の通り執り行いますこと

ご案内申し上げます

平成三十年 四月一日

記

一、日時 六月二十四日(日曜日)

午後十二時十五分

一、場所 福山ニューキャッスルホテル

3階「光耀」

広島県福山市三之丸町 八番十六号

電話 (084) 922-2121

医療法人 蒼生会 楠本病院

理事長 森末 千春

院長 森末 正博

ご来臨の節は平服にてお越しくださいますようお願い申し上げます

また誠に勝手ながら香典(供花)供物の儀は固くご辞退申し上げます

福山市南地区オープンカンファレンス
「心房細動と認知症を考える」

特別講演Ⅰ

座長 楠本病院 外科

石井 龍宏 先生

「心房細動と認知症」

福山循環器病院

循環器内科 医長

平松 茂樹 先生

特別講演Ⅱ

座長 楠本病院 病院長

森末 正博 先生

「BPSDの対応と

抗認知薬の使い方」

新阿武山病院

精神科 副診療部長

森本 一成 先生

3月14日、福山市南地区
オープンカンファレンスを当
院で行い、お二人の先生のご
講演を聞かせて頂くことがで
きました。

平松先生のご講演では、一
見関連性の薄い印象がある心
房細動と認知症ですが、それ
ぞれの危険因子を見ると、生

活習慣病な
ど共通点が
多いという
事や学ばせて頂きました。参
加者アンケートにも、「心房
細動と認知症に大きな関係が
あることがわかりました。」
という声が多くありました。

森本先生のご講演では、認
知症治療の薬物の事だけでは
なく、認知症の方への対応の
仕方についても知ることがで
きました。認知症の方への対
応では、環境、ケア、薬物療
法のバランスが大切で、ご本
人の言動をむやみに否定せ
ず、それらにはすべて意味が
あることを理解し、その理由
を解きほぐしていくことが患
者さんを理解することになる
と教えて頂きました。これか
ら高齢化社会の加速と共に認
知症患者さんも増加し、医療
における認知症患者対応は必
須になっていきますが、今回
のご講演では現場での対応に
ついて大変分かりやすく教え



蒼生 (2018年4月号)

発行 福山市曙町3丁目19番18号
医療法人蒼生会楠本病院
TEL (084) 954-3030
FAX (084) 954-9085
発行人 名誉院長 飯島崇史
発行日 2018年4月1日

